

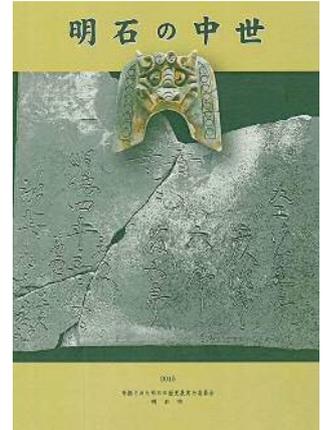


衣川 実介

『市之郷廃寺 梵鐘鑄造遺構』

市之郷廃寺仏堂の南と北側で梵鐘鑄造遺構が3～4基発見されました。遺構は直径1m～2m程度の円形の穴で、梵鐘鑄型の破片や粘土が鑄造後に捨てられた状態で出土しました。鑄型片のうち、撞座（つきざ）や乳（にゅう）部分が出土した鑄造遺構や、梵鐘下端部分の鑄型がそのまま残っているものもあり、撞座の文様から中世末頃と推定されました。

梵鐘の銘文に播磨の鑄物師名が登場するのは、『播磨国 総社』の銅鐘で、津田村内記石根丸、永正3年（1506）です。野里鑄物師の芥田家の作品で姫路市御立にある勝瑞寺、芥田勝久 明応6年（1550）。銘文は16世紀で、この梵鐘鑄造遺構で活躍したのは播磨の鑄物師ではないようです。



どんな鑄物師達が梵鐘を鑄造したのだろうか？いつもお世話になっている

『神崎勝』先生（NPO法人妙見山麓遺跡調査会）に教えを請うと、この本にまとめていると『明石の中世』の報告書が送られてきました。（2015年明石市）その中に『報恩寺跡の梵鐘鑄造遺構』中世の鑄物師の業態が以下の様に報告され、その一部を転載させていただきます。

報恩寺跡における鑄物師の問題

中世の梵鐘鑄物師には、居職と出職（出吹き）がありましたが、そのほか、各地の都市近郊には鑄造センターができていました。報恩寺跡は出吹き（出職）の一例とみられます。出吹き職人は銅や錫などの素材や工具類は持参しますが、労働力や粘土、燃料などは地元で調達したと考えられますから、出吹きの場合でも、センターから出張した鑄物師は地元の鑄物師と協力して作業を行う場合が多かったと思われます。

報恩寺跡のある明石市西部は、魚住を中心に良質の粘土の産地でしたし、土器生産にとまなう木炭の製造技術にも長けていたと考えられます。

また報恩寺跡では、定盤が少なくとも二面あって、ひとつの鑄造土坑で二回以上の鑄造を行っていたことが分かっています。寺院の建設が盛んであったこの時期に、報恩寺の建立（明徳4年（1393））に際して、その系列寺院である長坂寺や龍華院など近隣の寺院の注文にもこたえたものでしょう。

報恩寺跡の鑄物師の名や本貫地などは分かりませんが、14世紀といえは在地の鑄物師の活動が盛んになる時期です。河内系の鑄物師のほかに、中世播磨の鑄物師として伊豆氏や国次氏、平氏、姫路の野里鑄物師らが知られていました。

室町時代、1500年末ごろに成立したとされる職人歌合『七十一番職人歌合』には播磨鍋の売り子が登場する。しかし梵鐘の作れる鑄物師は播磨には、まだ居なかったと想像されます。

参考資料

ひょうごの遺跡 兵庫県立埋蔵文化財情報 69号 2008年11月20日
市之郷遺跡調査報告書Ⅴ 梵鐘鑄造遺構 兵庫県教育委員会
『明石の中世』『報恩寺跡の梵鐘鑄造遺構』（2015年明石市）

梵鐘鑄造遺構

